

経営士学提唱60年

経営士学誌編集責任者
副会長 藤木 清次

昨年（2012年）は故平井泰太郎博士が、経営士学を提唱されてから60年（『国民経済誌』昭和27年1月号）という節目の年でした。本学会では昨年7月、合同会社経営士東京のご協力を得て小冊子『経営士学—経営コンサルタント経営学—』を発行いたしました。また10月には「経営士学の今日的意味」を統一テーマとして第5回経営士学フォーラムを開催いたしました。

「経営士学の今日的意味」では、前大阪産業大学 経済学博士 裴 富吉（べえ ぶぎる）先生のご講演をいただきました。裴先生のご専攻は、経営思想史、経営学原理です。裴先生は著書のなかで、経営士学に関して「平井泰太郎は、昭和27年1月の論稿で、『経営学の中に、経営士学としての経営学が誕生すべき要請が存在することをもまた知らなければならぬと思う』と述べていた。この発言は、半世紀以上も時が経ったいまでも、その妥当性を発揮しうるものである。」「この『経営士学』に関する主張に限っていえば、21世紀においても実現されつつある現象を、平井はとらえていたことになる。」（『経営学理論の歴史的展開—日本学説の特質とその解明—』三恵社、2008年9月、56頁～57頁）と述べられています。裴先生には「歴史のなかの経営士学」について、ご講演をいただきました。うえに要旨を本誌にお寄せくださいました。心より御礼申し上げます。

あわせて本誌には、第4回経営士学フォーラムに於ける発表者の要旨も掲載いたしました。第4回経営士学フォーラムは、第3回経営士学フォーラムにつづいて「ディーセント・ワーク」を統一テーマといたしました。

思うに、現代は欲望肯定の時代であり、巷には金儲けを促進する新刊書が溢れています。しかし、だからこそ人間は欲に従って働き、同時に、欲を制して義務を

果たす覚悟が必要になります。本学会がディーセント・ワークにこだわるのも、そうした社会風潮への批判が込められているからだといえます。

ところで、仏教の教えに「上求菩提 下化衆生（じょうぐぼだい げけしゅじょう）」ということばがあります。上求菩提とは、修行者が自己の悟りを求め日々の修行に励むこと。下化衆生とは、仏の道を迷える衆生に説き済度すること、と解されています。悟りを真理や理想、正しい生き方といいかえると、上求菩提とは、日々、真理や理想、正しい生き方について哲学すること。下化衆生とは、真理や理想、正しい生き方を実践のなかで活用することだといえます。ひと言でいえば、真理への求道心と活用の合一が仏教修行者のあるべき姿、すなわち人格だといえます。

思えば経営コンサルタントも、大学の教授や思想家、政治家たち、そうした知識人や偉い人と思われるような人の意見を正しくさばきわかるほどの高い見識をもちながら、同時に日々の仕事におわれているクライアントに寄り添い、相談相手となって、ただしずかに傾聴している。そうした経営コンサルタント的人格が必要になりましょう。しこうして、経営コンサルタント的人格の形成には経営の真理について哲学する場と真理を活用する場が必要になります。

別言いたします。実力主義の世界で生きる経営コンサルタントにとって、真に必要なものは、日々、真理を志向する精神と真理を活用する場だといえます。そうして、わたくしは真理志向の場が経営士学学会であり、活用が合同会社経営士東京であると思っております。

本学会、経営士東京ともに多くの方々のご利用をお願いする次第でございます。なお、会社に属している方や事務所の代表者は所属している会社や事務所が活用の場となります。誤解のないよう付言いたします。

改めて、ご多忙のなかにもかかわらず玉稿をお寄せいただきました先生方には厚く御礼申し上げますとともに、本誌が発刊できますのも会員の皆様のご支援の賜物でございます。心より御礼申し上げます。

さらに経営士学の研究に努め、活用してまいりたいと思っております。今後ともご支援を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。